

『源氏物語』の「わらい」と人物造型

新井美紗貴

はじめに

「わらい」を表す古語は大きく「わらふ」「ゑむ」「ほほゑむ」に分けられる。柳田國男は「わらふ」は嘲笑、「ゑむ」「ほほゑむ」は好意的な感情を表すと捉えているが^(注1)、『源氏物語』にそれは当てはまるのだろうか。本稿では、まず、「わらふ」「ゑむ」「ほほゑむ」のそれぞれの語意を考え、その上で『源氏物語』の「わらふ」「ゑむ」「ほほゑむ」のすべての用例を分析し、それぞれの性質、語意の差を明らかにすることによって、この問題について考察する。また、『源氏物語』に登場する人物の「わらい」から読み取れる人物像を考えていきたい。

第一章 わらふ・ゑむ・ほほゑむの語意

まず、「わらふ」「ゑむ」の違いに着目し、『角川古語大辞典』で「わらふ」と「ゑむ」の意味を引く。

「わらふ」：①にこにこする意の「ゑむ」よりも感情の表し方が強く、口をあけて声を立てて喜びやおかしさを表出する。イ、声を立てておもしろがる。哄笑する。ロ、あざける。嘲笑する。

「ゑむ」：①につこりする。ほほえむ。微笑する。(中略) 口もとをほころばせる意で、声を出して喜ぶ意の「わらふ(笑)」とは、区別して用いられている。

『角川古語大辞典』の語釈から読み取れる「わらふ」と「ゑむ」の明らかな違いは声の有無である。『時代別国語大辞典 上代編』の「わらふ」の解説にも、「エムが顔をほこ

ろばせる表情の面をいうのに対し、ワラフは声をあげて哄笑する意であろう。」とある。上代・中古において「わらふ」と「ゑむ」の動作の違いは、「声の有無」という点ではつきりしている。「ゑむ」に声が伴う表現が存在するとして、『枕草子』にある「ゑみたる声」が挙げられるが、松尾聰氏は「これも、「たのしくなつてにこにこ（アルイハにやにやカ）しながら出す声」とみるべきであつて、「ゑむ」ことが直接「声」になるわけではない。」^{〔注2〕}と述べられてゐる。

では、状況による使い分けはどうか。柳田國男は次のように述べてゐる。

ワラフは恐らくは割るといふ語から岐れて出たもので、同じく口を開くにしても大きくあけ、やさしい気持ちの伴はぬもの、結果がどうなるかを考へぬか、又は寧ろ悪い結果を承知したものと考へられる。従つて笑はれる相手のある時には不快の感を与へるものときまつて居る。エムには如何なる場合にもさういふことが無い。是が明かなる一つの差別であつた。^{〔注3〕}

柳田は「わらふ」を、相手を精神的に攻撃するマイナスなものとして捉え、逆に「ゑむ」は、優しい気持ちを与える、また、人生を平穩に送るための潤滑油として、プラスに捉えている。確かに、「わらふ」は一つの攻撃方法^{〔注4〕}と取れ、陰鬱な側面を持つてゐる。特に、ベネディクトによる

と、日本は「恥の文化」を持つ国^{〔注5〕}とされ、平安時代の貴族社会という狭い世界において「笑われる」ことは死ぬよりも辛い屈辱であつたようである。

「わらふ」は、「笑う者」と「笑われる者」という、一種の上下関係を作り出し、多くの場合「笑う者」だけが優越や快楽の念を持ち、「笑われる者」は貶められている場合が多い。だが、少なくとも「笑う者」からすれば、「わらふ」は快楽だ。この価値を理解した上で「笑われる」ことをよしとし、上位者の者に「わらつてもらう」ことでもてなすという方法もある。神に捧げられてきた「狂言」などは、その最たる例であろう。

では、「ゑむ」はどうだろうか。本当に、不快の感情を与えることは一切無いのか。『万葉集』で「咲」（エム）が詠われる時は、恋の歌が多く、男女の親和状態を表すことが多い。

道の辺の 草深百合の 花笑みに 笑みしがからに
妻と言ふべしや

（『新編日本古典文学全集 万葉集』巻七 一二五七）

これは、百合の花が咲いたような女の笑みを、好意の表れと誤解した男への詠だが、男が誤解したのは、「ゑむ」が相手への好意のサインと取られていたからと言える。

「ゑむ」の語意は、好意の表れ、親和状態を相手に示すものであつた。しかし「ほほゑむ」になると、どうである

か。『角川古語大辞典』で「ほほゑむ」の意を見てみる。

「ほほゑむ」：①薄笑いを浮かべる。顔をほころばせる。

(中略) 好意的でなく、さげすみの気持ちを伴っている場合が多くある。

傍線で示したように、「ほほゑむ」は「ゑむ」と違い、他人を嘲るものが多いようである。

「ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらすあさの袖かな幼き者は形蔽れず」とうち誦じ給ひても、花の色に出でて、いと寒しと見えつる御をもかけ、ふと思いでられて、ほ、笑まれたまふ。(「末摘花」)

これは、末摘花の容姿を源氏が「ほほゑむ」場面だが、「ほほゑむ」とありながら、明らかに柳田の定義する「ゑむ」ではなく、声は無いものの、むしろ「わらふ」の性格を持っている。「ゑむ」でも「ほほゑむ」である時には、すべてが好意的なものではなく、むしろ不快の念を与えることが多い。

だが、全ての「ゑむ」が好意的な笑いに当てはまるわけではなく、また、「ほほゑむ」も全てが蔑みを表しているわけではないことは押さえておきたい。

「さも御けしきたまはらまほしう侍しかど、(中略)胸に手をおきたるやうに侍」と申たまふ舌ぶりと物さはやかなり。

ゑみ給ぬべきを念じて、(「行幸」)

この「ゑむ」は近江の君の言動に対する内大臣の嘲笑であることで間違いなく、だからこそ、本人の前で笑うのを控えたのだろう。

「ほほゑむ」でも例外と取れるものがある。次の『うつほ物語』の例は、「ほほゑむ」とあるが、そこに蔑みはなく、非常に和やかなものである。

綾の搔練の一重襲、二藍の織物の衣、脱ぎかけておはするを、おとど見たてまつりたまひ、君たちのおはするに、「若きぬしたち、習ひたまへ。子持ちはかくぞいたはりなすよ」とのたまふ。誰も誰もほほ笑みておはさうず。(「新編日本古典文学全集 うつつほ物語」)

このように、数例ではあるが、「ゑむ」と「ほほゑむ」の意味が、それぞれに近い意味で使われる例が見られた。このように互いに決定的な違いがないことを考えると、「ゑむ」と「ほほゑむ」の本来の語義としては、本質的な差はなく、もともとは同じ語であつたように思えてくる。これに関して松尾氏が興味深い説を述べられている。

上代語の「ゑむ」は、中古語の「ほほゑむ」の意味をも包括していたのかも知れない、(中略)つまり、上代では「にこにこする」も「にやにやする」も「ゑむ」であらわしたが、中古になると「にこにこする」は「ゑむ」、「にやにやする」は「ほほゑむ」で言い分けたのではなかるうか、ということである。(注)

松尾氏は検証の結果、「ゑむ」がほぼ全て「にこにこ」笑いであるとされ、そのことから、上代にも「ほほゑむ」は存在したが、文献上に残されなかっただけと、「上代語の「ゑむ」は、中古語の「ほほゑむ」の意味をも包括していた」という説を撤回されている。しかし、これまで検証してきたように、「ゑむ」でありながら「ほほゑむ」の意に近く、「ほほゑむ」でありながら「ゑむ」に近い意が認められる例がある。よって、松尾氏が最初に考えられていたように、「ゑむ」は「ほほゑむ」の意を包括していた可能性はあるのではないだろうか。上代に関しては、資料の少なさから、確実なことは言えない。だが、「ほほゑむ」という語が存在していながら、その語が上代の文献上に全く残っていないのは不自然に感じる。

第二章 『源氏物語』における「わらふ」「ゑむ」「ほ

ほゑむ」

では、『源氏物語』において「わらふ」「ゑむ」「ほほゑむ」の語意の違いは意識されていたのか。

『源氏物語』では、「わらふ」が会話をしている時に使われていることが多い。

「上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎ、はたむつかり給はんとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、
右近に語らひて、笑ひ給。
〔玉鬘〕

「ひとりゑみ」の用例は二例あるが、「ひとりわらひ」の用例は『源氏物語』中には一例もなく、周りに誰もいない状況で「わらふ」が使われている用例は、「帚木」の左門頭の「人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ」を除けば、無いと言っている。ここから、『源氏物語』中の「わらふ」という行為は、一人きりの時にするものではなく、目の前に相手がいて行われることが多いようで、これは、「わらふ」に声が伴うことに関係していると思われる。一人きりの時に声を上げるとするのは、あり得ないことでは無いとはいえ、少し不自然な状況だろう。

また、嘲りを表すことも多い。

「海竜はうの后になるべきいつきむすめななり。心高
さ苦しや」とて笑ふ。
〔若紫〕

『源氏物語』中の「わらふ」は、第一章で示した「わらふ」の語意と変わらず使われているようである。

では、「ゑむ」「ほほゑむ」についてだが、『源氏物語』以前の作品では、「わらふ」に用例が集中し、「ゑむ」「ほほゑむ」の使用例は少ない。まず、『源氏物語』の用例数は、「わらふ」系：一五〇例、「ゑむ」系：七二例、「ほほゑむ」系：六九例であるが、それに対して他作品の「ゑむ」系、「ほほゑむ」系の用例数がどうであるかは、次の表を参照していただきたい。

他作品の「わらい」の用例数

『竹取物語』	『うつほ物語』	『堤中納言』
わらふ系…四例	わらふ系…一三七例	わらふ系…一〇例
ゑむ系…〇例	ゑむ系…一四例	ゑむ系…三例
ほほゑむ系…一例	ほほゑむ系…九例	ほほゑむ系…一例
『伊勢物語』	『落窪物語』	『枕草子』
わらふ系…三例	わらふ系…六四例	わらふ系…一〇五例
ゑむ系…〇例	ゑむ系…一三例	ゑむ系…十五例
ほほゑむ系…〇例	ほほゑむ系…五例	ほほゑむ系…三例

多くて『落窪物語』五例、『うつほ物語』の十例という程度で、「わらふ」の用例の十分の一にも満たない。また、「ほほゑむ」が嘲笑ではなく、にこにこ笑いを表す用例もあり、「ゑむ」と「ほほゑむ」が混用されている。対して、『源氏物語』は「ほほゑむ」系は六九例であり、割合は「わらふ」系の三分の一以上、正編においては半分以上である。他作品に比べ、これほど顕著に「ほほゑむ」が多用されているということは、『源氏物語』では「ほほゑむ」が意識して使用されている可能性がある。『源氏物語』で、「ゑむ」と「ほほゑむ」が使い分けられているのだが、『源氏物語』でも、にこにこ笑いを「ほほゑむ」で表現している場面はある。だが、吉村研一氏は、『源氏物語』では「ほほゑむ」が頭を使って笑うのに対して、「ゑむ」は反射的に出る笑いなのである。頭を使わない生理的な笑い」という使い分

けがなされると述べ、「ほほゑむ」系の笑いには何らかの意味が持たされるとされた。また、「紫式部こそ、我が国で初めて「ほほゑむ」という言葉が多用し、かつ「ゑむ」と書き分けた作家なのである」^{〔注7〕}とも述べ、「ゑむ」と同じような「ほほゑむ」でも、「ゑむ」とは意味分けがされているとされた。確かに、「ゑむ」場面はあるが、「ほほゑむ」場面は無い。

また、『源氏物語』で「ほほゑむ」人物は、貴族に限られており、片岡照子氏は

一般に、田舎人、供人、侍女、下衆と呼ばれる人たちの「ゑむ」「わらふ」の用例は、物語中、四六回も使用され、その他、特にそれぞれの項で記すように、複合語や副詞が附加されて、貴族たちよりむしろ表現法は豊富であるにもかゝらず、「ほほゑむ」だけが、全く使用されていないということは、これらの身分の人びとが実際に「ほ、ゑむ」笑い方をしなかったのか、あるいは、客観的に、つまり作者が、その人たちの笑いを描写する場合、「ほ、ゑむ」という表現方法を与えるのをゆる

さなかつたのかのいずれかであろう。^{〔注8〕}

と述べている。貴族社会を描いた『源氏物語』では、下賤の者たちの笑いはあくまで場面の効果として使われ、複雑な心理を表す「ほほゑむ」動作をさせて、人物像を描き出す必要はなかつたのではないだろうか。例えば

「たが詣で給へるぞ」と問ふれば、「内大臣殿の御願果たしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなき程の下種だに心ちよげにうちはらふ。(注)〔濔標〕この下種の「わらふ」は、下種さえ知っていた、源氏が願はたしに来ているという事実を知らなかった明石君の惨めさを一層感じさせる笑いである。また、

まだほの暗けれど、雪の光にいとゞきよらに若う見え給ふを、若い人ども笑みさかへて見たてまつる。

〔末摘花〕

これは、若い人どもが「ゑみさかゆ」ことによつて源氏の美しさを引き立たせている。身分の低い者たちの笑いは、この使われ方が多い。他は、滑稽さの強調など、いずれも場面を引き立たせる効果として使われている。

以上を踏まえた上で一見同じに見える、源氏が幼い紫上に向ける「ゑむ」と「ほほゑむ」を見てみよう。

1、やうく起きみて見給に、鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐ給へるが、いとうつくしきに、われもうち笑まれて見給。

〔若紫〕

2、「いで君も書い給へ」とあれば、「まだようは書かず」とて見上げ給へるが何心なくうつくしげなれば、うちほ、笑みて

〔若紫〕

3、「御手はいとおかしうのみなりまさるものかな」と

ひとりごちて、うつくしとほほ笑み給。(賢木)

1の反射的に出た笑みに比べ、2、3について吉村氏は、源氏は「単なる可愛らしさを感じたのではなく、それ以上のもの、つまり、女としてのいとおしさ、恋心を感じたのである。」(注)と述べている。だとしたら「ゑむ」と「ほほゑむ」では意味合いが違ふと言える。だが、1では感じなかったのに、何故2と3では女としてのいとおしさを感じているのか。その理由として私は、源氏は紫上の将来を想像しているのではないかと考えた。2は、源氏が紫上に手習や絵などを書いて見せ、教育を始めている場面である。「まだようは書かず」と言っている少女が、将来はどのやうに成長していくのか、また、どのように自分の手で成長させていこうかと考え、ほほ笑んだのではないか。3はだんだんと理想に近づく紫上に満足を覚え、ますます将来を楽しみに感じている。また、2の場面の頃からの成長も感じていることと思う。2、3の笑みは、源氏が紫上の幼い可愛らしさを感じながらも、その中で、紫上の将来を想像し、女性としての愛しさを感じての笑みであり、反射的に出た1の笑みに比べて、複雑な笑みである。

以上から、『源氏物語』において「ゑむ」と「ほほゑむ」が表現する状況は異なり、「ゑむ」は反射的な笑み、裏表の無い単純な笑みであり、「ほほゑむ」は何か含むところがあり、「ゑむ」よりも複雑な心理が隠れている笑みであ

りそうである。

第三章 「わらい」による人物造型

第一節 光源氏 薫 匂宮

『源氏物語』で特徴的なのが、源氏の「ほほゑむ」の用例が他の人物に比べて非常に多いことだ。割合で表すと、正編の「ほほゑむ」の用例の中で、源氏の「ほほゑむ」は約五七%であった。『源氏物語』では「ほほゑむ」によって、源氏のどのような性質を表現しようとしているのか。

源氏はどのような時にほほ笑んでいるのか。源氏の「ほほゑむ」三七例を、「ほほゑむ」要因によって分類した。相手に対する嘲りの気持ち強いものを「嘲笑」、相手馬鹿にしながらも、親しみが込められているものは「からかい・冗談」と分けた。また、恥ずかしさをこまかすための笑みは「照れ」、相手に対して後ろめたい事実を隠すためや、自分の考えについて明言を避ける時の笑みを「ごまかし」の笑み」と分けることにする。

- ① 情愛を表す笑み 一三例
- ② 嘲笑 八例
- ③ からかい・冗談 五例
- ④ 苦笑 三例
- ⑤ 照れ 二例

⑥ 意志の伝達

二例

⑦ ごまかしの笑み

三例

⑧ 満足

一例

この分類に因れば、「①情愛を表す笑み」が最も多いとわかる。相手の容姿の美しさに対してではなく、男女間のやり取りのなかで、機転を利かす相手に対して感心する場面が多い。①の中でも、直接、または間接的に、紫上に向けた笑みが最も多く、五例であった。一部を挙げる。

1、舟とむるをちかた人のなくはこそあす帰り来むせなと待ちみめ

いたう馴れてきこゆれば、いとにほひやかにほゝ笑みて
〔薄雲〕

2、「君こそは、さすがに隈なきにはあらぬものから、人により事に従ひ、いとよく二筋に心づかひはし給けれ。さらに、こゝら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いとけしきこそものし給へ」とほゝ笑みて聞こえ給。
〔若菜下〕

これらの例は、ただ単に愛しさを表しているのではなく、紫上の嫉妬する様子に対しての苦笑、自分の心をコントロールする紫上に対して感心するなど、様々な感情が込められた「ほほゑむ」である。六条院の他の妻へ向けた「ほほゑむ」と比べてみる。まず、花散里への「ほほゑむ」であるが、

ふと見知りたまひにけりとおほせど、ほ、笑みて、な
あるを、よしともあしともかけ給はず。〔蚩〕

これは蚩兵部卿宮と帥の親王を比較し、蚩兵部卿宮の方が
優れていると評する花散里に対し、源氏がほほ笑む場面であ
るが、情愛を示しているわけではなく、源氏が蚩兵部卿
宮と帥の親王どちらが優れていると考えているか、自身の
意見の明言を避けるためのほほ笑みである。

次に明石君に向けた「ほほゑむ」は、直接ではなく、彼
女がいない場所で、彼女の歌を詠んで源氏はほほ笑んでい
る。

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をと
へる鶯声まち出たる。

なども、

咲ける岡べに家しあれば。

など、ひき返し慰めたる筋など書きませつ、あるを、
取りて見給ひつ、ほ、笑み給へる、はづかしげ也。

〔初音〕

この時源氏は、明石君の教養を感じているであろうし、
娘の明石姫君からの返事を喜ぶ明石君の様子をほほ笑まし
く思っているであろう。情愛は感じられるが、紫上のように、
嫉妬する姿や、感情を抑える姿に愛しさを感じている
わけではない。他の妻との関係性（嫉妬）に関連して、源
氏が笑みを向ける女君は紫上しかない。源氏の紫上への情

愛の深さが窺え、源氏の中で、多少嫉妬を疎ましく感じる
ことはあるにしても、紫上は嫉妬しても良い立場、嫉妬を
許せる立場であったことが窺える。2の例で、「君こそは」
「御ありさまに似たる人はなかりけり」と述べていること
からもわかるように、源氏にとつて紫上は唯一の存在で
あったことが窺える。しかし、この賞賛に対して、紫上の
反応はない。中島尚氏は、

女三宮側に行く光源氏に紫上は何も言わない。このほ
ほゑみこそは、心を開いてなごんだはずのものが、まっ
たくその意に反してほとんど暴力的な表情にかわつて
いることを示すものではないだろうか。はたせるかな
紫上はその直後、胸を病み、世間では茅死去の噂さえ
流されるに到るのである。（中略）最大のほめことば
に類するものが、そのまま同時にその人の人格をしぼ
りつけ化石化してしまうように働いていることを読み
とるべきなのではあるまいかと思う。^{〔註10〕}

と述べており、源氏の紫上に対する愛情と、紫上の源氏
に対する感情に、隔たりを感じられる場面でもある。女三
宮の降嫁が決まって以降の紫上の心情については、後に彼
女の「わらい」を考えていく中で触れることにする。

源氏の愛情は「ほほゑむ」で表され、その内に単なる愛
情ではなく女君たちの言動に対する想いを含ませること
で、源氏は女君の容貌だけでなく、内面、器量を見て情愛

を感じていることを示しているのではないだろうか。

さて、続編では「ほほゑむ」の用例が減り、主要人物の薫と匂宮が「ほほゑむ」用例も少なく、両者とも一例ずつだ。しかもそのほほゑむを向ける相手は、共通して浮舟である。けれど、薫が浮舟へ向ける「ほほゑむ」と、匂宮の浮舟に向ける「ほほゑむ」は、意味合いが違うようだ。

まず、薫の「ほほゑむ」を見てみる。浮舟が匂宮と通じていると感じた薫が浮舟に対して贈った歌に、うまくごまかして返事をよこした浮舟に感心する場面である。

所違へのやうに見え侍ればなむ、あやしくなやましくて何ごとも。

と書き添へてたてまつれつ。見給て、さすがにいたくもしたるかな、かけて見をよばぬ心ばへよ、とほゑ、笑まれたまふも、にくしとはおぼしはてぬなめり。

〔浮舟〕

薫は大君の形代として、浮舟の外見しか見ておらず、浮舟自身に愛情を示すことは無かった。この「ほほゑむ」は、浮舟に情を感じながらも、皮肉混じりの笑みで、親愛を示すものではないが、浮舟の才覚を発見し、感心している。薫は、匂宮と浮舟が関わる事で初めて、浮舟という人物を見直すに至り、彼女の内面を見始めた。今井源衛氏は「浮舟の心中の感懐が、語り手の地の分によって内側から具体的に叙述されるようになるのは、前述のごとく、浮舟巻、

とくに匂宮と通じて以後である。〔注11〕と述べられているように、浮舟の意志や感情が顕れてくるのは「浮舟巻」以後であり、「大君の人形」としての浮舟ではなく、一人の人間としての浮舟によりやく焦点が当てられたことがわかり、それに伴って薫も浮舟という一個人を認識する。

一方、匂宮の浮舟に向ける「ほほゑむ」はどうであったかというところ、

心をば嘆かざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

とあるを、変はらむをばうらめしう思ふべかりけりと見給にも、いとらうたし。「いかなる人の心変はりを見ならひて」などほゑ、笑みて

〔浮舟〕

この「ほほゑむ」は、浮舟を幼いと感じながらも、その幼い様子に愛情を感じていることを表している。前の薫の笑みと比べ、浮舟との交流を楽しんでおり、恋人同士らしい雰囲気を出している。しかし、匂宮と浮舟の交流は、男が女を幼いと感じている点など、源氏と夕顔の交流を連想させ、源氏と夕顔の結末を思うと、どこか刹那的にも感じる。匂宮と浮舟、源氏と夕顔の関係性の類似点について、今井源衛氏は、「男は女に身分を明かせと求めるが、女はやさしく甘えた応対をしながらそれには応じない」〔注12〕という点を挙げられている。また、夕顔は「山の端の心も知らでゆく月は上の空にて影や絶えなむ」〔夕顔〕という

歌を、浮舟は「橘の小鳥の色は変わらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ」(「浮舟」)「降りみだれみぎはに氷る雪よりも中空にてぞ我は消ぬべき」(「浮舟」)という二首の歌を詠んでいるが、両者の歌に対し同氏は、「不吉な前途を予感するもの」(注13)とし、「女がこうした内心の不安を詠ずるのに、相手の男は源氏・匂宮共にその真意を察し得ない(中略)この設定の共通性もすこぶる特徴的といえる。」(注14)とされている。

両者の「ほほゑむ」を比べることで、薫と匂宮の浮舟との関わり方の違いが見えてくる。薫は浮舟を形代として扱っていたため、浮舟自身を見ず、匂宮と浮舟が通じて初めて、浮舟に執着らしい執着を見せ始める。匂宮は、浮舟の身分は低く見ていたようだが、浮舟を魅力ある女性と感じ、恋人らしく接している。しかし、その交流は利那的でもある。

正編と続編の「ほほゑむ」の使用例の差を契機に、源氏、薫、匂宮の「ほほゑむ」の検証を行った。その結果、「ほほゑむ」の用例を分析することによって、三人がそれぞれ、どのように女性と関わっているかが見えてきた。

第二節 紫上 中君

女性は男性に比べると「わらい」の用例が少なく、ほとんどの人物が一、二例程度の使用例しかない。しかし、そ

の女性の中で、紫上は用例数が九例であり、突出して多い。紫上の「わらふ」系、「ゑむ」系、「ほほゑむ」系の用例を以下に全て挙げる。また、先に述べた、女三宮の降嫁決定後の、紫上の心情もここで述べていきたい。

- 1、やうく起きゐて見給に、鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐ給へるが、いとうつくしきに (「若紫」)
- 2、手づからこの赤鼻をかきつけ、にははして見給ふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見るしかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひ給。 (「末摘花」)
- 3、「思はずにのみとりなし給ふ御心の隔てを、せめて見知らずうらなくやは、とてこそ。いはけなからん御心には、いとようかなひぬべくなん。いかにうつくしきほどに。」とて、すこしうち笑み給ひぬ。 (「松風」)
- 4、「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしきおりおりありし御心ざまの、思出でらるゝふしぶしなくやは」と、ほほ、笑みて聞こえ給へば (「胡蝶」)
- 5、御簾の吹き上げらるゝを、人々をさへて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いとみみじく見ゆ。 (「野分」)
- 6、「あなうたて、めでたしと見たてまつるとも、心もて宮仕ひ思たらむこそいとさし過ぎたる心ならめ」とて、笑ひたまふ。 (「行幸」)

7、すこしほ、笑みて、「身づからの御心ながらだにえ定め給まじかなるを、いづこにとまるべきにか」と、言ふかひなげにとりなし給へば　〔若菜上〕

8、「物越しに、はつかなりつる対面なん、残りある心ちする。いかで人目とがめあるまじくもて隠して、いま「たびも」と語らひきこえ給。うち笑ひて、「いままめかしくもなりかへる御ありさまかな。むかしをいまに改め加へ給ほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみ給へるまみの、いとらうたげに見ゆるに　〔若菜上〕

9、「まろがはべらざらむに、おほし出でなんや」と聞こえ給へば、「いと恋しかりなむ。まろは、内の上より、宮よりも、ばゞをこそまさりて思きこゆれば、おはせずは心ちむつかしかりなむ」とて、目おしすりてまぎらはし給へるさま、おかしければ、ほ、笑みながら涙は落ちぬ。　〔御法〕

1と2は子どもの頃の屈託のない「わらい」で何の憂いも感じられない。7の「若菜上」の用例までの1から6の「わらい」は、複雑な心理からではなく、自然に出た笑みであろう。ただ3は、源氏から明石姫君の養育を頼まれるという、紫上にとっては複雑な状況の場面である。自分の子がない紫上としては思うところがあつただろう。だが、「ほゑむ」ではなく「ゑむ」が使われている事から、この笑

みは、まだ見ぬ姫君の世話をする事を想像して、純粹に楽しみに思う気持ちから出た笑みではないだろうか。しかし、7から9の笑みは、明らかに6までの「わらい」と違い、憂いを帯びている。高野香織氏は、

第一部と第二部では紫の上の「わらひ」が違うことがわかる。この「わらひ」の変化から紫の上自身の変容をみてとれるのである。

「若菜上」巻で女三宮が源氏のもとへ降嫁する。そんなことは決してありえないだろうと安心しきついていた紫の上は、精神的に大きな打撃をうける。源氏への信頼はゆらぎ、出家を願うようになる。そんな紫の上から笑顔が消える。笑わなくなつたのではない。笑えなくなつたのだ。^{〔注15〕}

と述べられている。また、7の場面は女三宮のもとへ行く源氏が、紫上に事情を説明する場面である。中島尚氏は、この場面に對し

光源氏はむしろ紫上が気の毒で、彼女にすまないいと愛情をこめているのである。それに対し紫上は、光源氏自身の悩んで定めかねているものを私がどうして、という。共感しようにもしかねる、また他の女のもとに行けとも言い切れぬ感覚が、このほほえみにこりかたまつてあらわれる。明石君に對したばあい、玉かつらのばあいをへて、こちらは院の思わくさえ紫上の上へ

落ちかかる。われとわが身にもどうしようもないような、どこかが欠け落ちるような感情が「目に近く」の歌で爆発する。(中略)長い時間のたつたあと、紫上には何かが見えてきたかのようである。確実のように思われていたものが失われたような感じになったのである。(注16)

と述べられている。紫上に対し弁明する源氏と、それをどこか諦観した態度で聞く紫上との溝を感じる。女三宮の降嫁が決まるまでの紫上は、嫉妬心を表に出すこともあった。特に明石君に対しては、嫉妬心を露にする事が多かった。それができたのは、今まで彼女が源氏の正妻格であったからである。しかし、女三宮が源氏の正式な正妻となってしまうからは、いくら源氏が紫上を女三宮より重く扱おうと、女三宮との身分差は埋められない。源氏が女三宮を紫上より重く扱うことは、身分的には妥当であり、むしろそうされるべきなのである。紫上より身分が低かった明石君の時とは違い、源氏が女三宮のもとに行くことは、非難できないことなのである。そして、紫上が頼みにできる後ろだては源氏しかない。今までは「正妻格」という地位があったが、それはなくなり、紫上の立場は非常に不安定になった。源氏に見放されては、紫上は生きてはいけず、源氏が望むような人物であらねばならなかった。源氏が紫上に向ける賛辞は、中島尚氏の述べるように「その人

の人格をしばりつけ化石化してしまふように働いて」しまい、感情を表に出すことができなくなった紫上は、笑みの中に感情を隠すようになり、精神的にも身体的にも疲弊していく。「若菜上」以降の「わらい」は、彼女の苦しい心情を表していると言えるだろう。

これに対して、続編の女性の用例の中で、最も「わらい」の用例が多いのが中君であり、中君の「わらい」は全五例である。そのうち「宿木」の例を挙げてみる。

我御袖して涙をのごひ給へば、「夜の間の心変はりこそ、の給ふにつけて、をしはかられ侍ぬれ」とて、す

こしほ、笑みぬ。(「宿木」)

この場面で中君は、六君のもとへ通う匂宮に対して、悲しい気持ちを隠し、気丈に振舞おうとしている。この状況は女三宮降嫁後の紫上の状況と似ている。中島尚氏も「これがいわば、正編の世界での紫上の造型のはるかな水脈のあらわれであるといつてよい」と述べている。しかし、紫上は、彼女の確立された地位が、女三宮降嫁によって瓦解するのに対し、中君は匂宮との間に男の子をもうけることで、危うかった自分の地位を安定させ、これ以降の三例の「わらい」に憂いを感じることは無い。

1、女君の御前に出で来て、いみじくめでたてまつれば、
る中びたるとおほして笑い給。(「東屋」)

2、「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそそう

とからめ、時々心やましくは、中く山水も濁りぬべく」との給へば、はては、「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、おかしう聞こゆ。〔東屋〕

3、「いとさ言ふばかりの幼さにはあらざるを。うしろめたげにけしきばみたる御まかげこそわづらはしけれ」とて笑ひ給へるが。〔東屋〕

1は田舎びた中将君への嘲笑、2は薫の懸想の言葉に対して、皮肉を交えた返答をして笑う場面、3は浮舟をあまりにも子ども扱いする中将君に対しての笑いで、いずれも悲しみの感情は感じられない。

紫上の「わらい」の用例は段々と憂いを帯びた「わらい」へと変化していったが、中君は「宿木」以降の用例に憂いは感じられず、当然涙が伴う「わらい」も無くなる。「わらい」を中心にして見た時、紫上と中君が対比的に描かれているように感じる。

第三節 弘徽殿女御（内大臣女）

内大臣女の弘徽殿女御であるが、彼女の「わらい」の用例は「ほほゑむ」のみ用例が二例ある。この二例の「ほほゑむ」がとも対比的に使われている。まず、一例目であるが、

「なか、いとさこのほかには侍らむ。（中略）かくの給ひさはぐを、はしたなう思はるゝにも、かたへは

か、やかしきにや」と、いとほづかしげに聞こえさせ給ふ。この御ありさまは、（中略）残り多かりげにほ、笑み給へるぞ、人にことなりけると見たてまつり給ふ。〔常夏〕

近江君を笑ひ者扱いする内大臣に対し、弘徽殿女御は近江君を擁護し、近江君への気遣いも見せ、その「ほほゑむ」も優しいものを感じる。だが、次の「ほほゑむ」はどうだろうか。

大輔の君といふ、持てまいりて、ひき解きて御覽せさす。女御、ほ、笑みてうちをかせ給へるを、中納言の君といふ、近くいて、そばく見けり。「いといまめかしき御文のけしきにもはべるかな」と、ゆかしげに思ひたれば、「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて給へり。〔常夏〕

この場面は、弘徽殿女御が近江君の、歌枕を乱用した珍妙な歌「草若み常陸の浦のいかゞ崎いかあひ見ん田子の浦波」（常夏）を受け取る場面である。前の例では、近江君に思いやりのある態度を示し、優しいほほ笑みを浮かべていた弘徽殿女御が、この場面では一転して近江君を見下す態度をとり、さらに珍妙な歌「常陸なる駿河の海の須磨の浦に波立ち出でよ箱崎の松」（常夏）を女御付きの女房が返すことで、近江君を馬鹿にしている。ここでの「ほほゑむ」は、明らかに人を貶める笑いである。

弘徽殿女御という同じ人物の「ほほゑむ」でありながら、前者と後者ではこうも性質が違っている。弘徽殿女御の「ほほゑむ」の例はこの二例のみであるが、『源氏物語』では、この二つの「ほほゑむ」の落差を使って、弘徽殿女御をどのように描いているのか。

近江君と関わる前の彼女は、品があり、思いやりのある発言をし、優しいほほ笑みを浮かべていたのに、近江君が歌を送ることで、そのほほ笑みは侮蔑を表すものになり、先で築き上げた女御像は一気に瓦解してしまった。近江君によって、結局は彼女も、父の内大臣や兄弟たちと同じであつたことがわかってしまう。さらに、本来は教養が深いであろう女御が烏澁な歌まで詠まされてしまう（実際に詠んだのは女御付きの女房）。最初の印象が素晴らしい人物であつたがために、近江君の歌を嗤う彼女は、最初の印象との落差が激しく、より滑稽に感じられてしまうかもしれない。

第四節 浮舟

続編で、他者から笑みを向けられることが多い女性が、浮舟である。他者が浮舟に向ける笑みとはどのような意味を持っていたのか。

『源氏物語』の中で笑む状況として、幼い子どもの無邪気な笑み、また、幼い子どもの言動を見て、可愛い、愛し

いと感じる事から笑むことがしばしばある。幼い子どもが笑む場面、幼い子どもの言動から、それを見た者が笑む場面は十二例あるが、内九例に「ゑむ」又は「ほほゑむ」と共に、「うつくし」「何心なく」いずれかの語がある。「うつくし」の意味は、『角川古語大辞典』によると、「①親の子に對する、夫の妻に對する、男の女に對する非常に親密な肉親的愛情を表す。いとしい②小さいもの、いたいけなものに對する情趣的な意味を表す。かれんなさま。かわいしさま。」であり、「何心なし」は、文字通り、無心である、無邪気である、という意味である。この「うつくし」「何心なし」と「ゑむ」「ほほゑむ」が一緒に使われていて、幼い子どもが関わらない例は、三例しか見られなかった。用例、語意から考えて、「うつくし」「何心なし」は幼さを表す場合が多いと言える。では、例外の三例を見てみる。

例外の内一例は、「末摘花」の巻の、源氏を見た大輔の命婦が、自然と笑みをこぼす場面である。この場面の源氏は、元服も済ませた成人だが、「若う」と表現されていることから、大輔の命婦から見れば源氏はまだ若く、「うつくし」と感じられるのだろう。対して、残りの二例を見てみる。

1、この御琴の音ばかりだに伝へる人おさくくあらじ」とのたまへば、何心なくうち笑みて、うれしく、かくゆるしたまふほどになりける、とおぼす。（若菜下）

2、隔てきこゆる心は侍らねど、あやしくて生き返ける程に、よろづのこと夢の世にたどられて、あらぬ世に生まれたらん人は、かゝる心ちやすらんとおぼえ侍れば、今は知べき人世にあらんとも思ひ出ず、ひたみちにこそむつましく思きこゆれ」との給さまも、げに何心なくうつくしく、うち笑みてぞまもり給へる

〔手習〕

1の「若菜下」の例は、源氏に琴の上達を褒められた女三の宮が無邪気にうち笑む場面、2の「手習」の例は、自分を頼りにする浮舟を妹尼が可愛く思う場面である。源氏に降嫁した女三宮はまだ十三歳ほどだが、当時からすると結婚をするような歳であるから、幼いとは言えないかもしれない。しかし、女三宮は度々その精神面の幼さが強調されている。ここでも、本来子どもがするはずの「何心ない」笑みを女三宮がすることで、彼女の幼さが強調されている。同じく浮舟も、大人であるにも関わらず、幼子のように「何心なくうつくし」と形容され、その浮舟を見て、妹尼は、子どもを見守る大人のようにうち笑んでいる。やはりこれも、浮舟の精神面の幼さの強調ではないだろうか。

浮舟が関係する「笑む」の例は「手習」の例の他に二例ある。その内の匂宮の例を挙げる。

心ば嘆かざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

とあるを、変はらむをばうらめしう思ふべかりけりと見給にも、いとらうたし。「いかなる人の心変はりを見ならひて」などほ、笑みて

〔浮舟〕

ここで注目したいのが「らうたし」という語だ。「らうたし」の意味は、『角川古語大辞典』では「①弱々しいものに、なんとなく心引かれるさま。また、かばいたくなるさま。②かわいらしいさま。③いとしいと思うさま。④いじらしいさま。また、かわいそうで気の毒なさま。」とあり、弱々しいさま、頼りないさまを表す語とされている。小学館の『古語大辞典』では、「①いたわしい。かわいそうだ。②弱々しく可憐だ。いとしい。かわいらしい。」とある。『枕草子』では、

をかしげなるちごの、あからさまに抱きて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。

〔新編日本古典文学全集 枕草子〕

と、赤子の様子を「らうたし」と述べており、この語も、まだ頼りない存在である幼さないものと結びつくことが多いと考えられる。三角関係に悩まされた女三宮と浮舟が、「幼さ」という共通点を持つてゐることは興味深い。ところで、大人である浮舟に、幼いイメージを与えているのは、どのような意味があるのだろうか。

浮舟や女三宮と同じように「幼い」イメージを与えられている女性として、夕顔がいる。彼女は玉鬘という子ども

がいる母親であり、当たり前だが幼い子どもではない。しかし、度々その若々しさが強調されており、大人でありながら子どものような言動をする夕顔は、守つてあげたいという気持ちを起こさせるほど、ひどく頼りない存在である。夕顔はこの後、物の怪に取り殺される儂い女性として描かれている。大人でありながら「幼い」性質を持つことは、存在の危うさに繋がっていくのではないか。そこで、浮舟に立ち返つて考えて見ると、彼女もまた、薫と匂宮との間で揺れ、自殺未遂というところまで追い詰められており、やはり、頼りなく、危うい存在であった。ここで注意しておきたいのが、浮舟の「幼さ」を表現する例が、「手習」の巻にあるということである。入水後の彼女は、自ら出家することを望み、強い意志を持つて薫に会おうとしない。けれども、浮舟は本当に強い意志を持った女性として生まれ変わっているのだろうか。入水前の「浮舟」の巻と同じように、入水後の「手習」の巻でも、見る者に「幼さ」を感じさせ、庇護の対象としてほほ笑まれている。長尾美都子氏も入水後の浮舟に対し、「蘇生後の浮舟自身には内面的に大きな変化はなく、出家の意思を通したというのも、人間的に強くなったというより逃避とも考えられる。」^{〔注17〕}と、述べている。死の淵から蘇り、強く薫を拒否する浮舟であるが、実はその存在はまだ頼りなく、危ういままなのかもしれない。

おわりに

『源氏物語』の「わらい」は、柳田國男が定義する「わらい」と完全には一致しない。「わらふ」という語には嘲笑の意味が多く含まれ、柳田の定義する「わらふ」と差異はなかったが、「ゑむ」は柳田の定義には当てはまらない。柳田は「ゑむ」が不快の念を与えることは一切ないとしたが、『源氏物語』の用例を見ると、嘲笑と取れるものが散見される。さらに「ほほゑむ」になると、多くの場合が嘲笑を含んでおり、『源氏物語』の「わらい」は明らかに柳田の定義した「わらい」と異なることがわかる。

また、『源氏物語』は混合されて使用されていたと思われる「ゑむ」と「ほほゑむ」に、「ゑむ」は反射的な笑み、「ほほゑむ」はより複雑な心理を背景とした笑みというように使い分けているのが特徴と言える。そして、「わらい」を場の効果としてだけでなく、「わらい」の効果によって人間の複雑な心理、置かれている状況を描き出し、奥深い人物像を造りだしている。そうすることで、物語の登場人物は、パターン化された存在ではなく、現実の人間と同じように愛情や苦悩を持つ人間であり、共感できる存在として、効果的に描かれている。

注

注1 柳田國男「笑の本願 女の咲顔」『柳田國男全集 一五』筑

摩書房 一九八九年

注2 松尾聰「わらふ・ゑむ・ほほゑむ」

『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』笠間書院

一九八四年

注3 注1に同じ

注4 柳田國男「笑の本願 笑の文学の起源」

『柳田國男全集 一五』筑摩書房 一九八九年

注5 ベネディクト『菊と刀』角田安正訳 光文社 二〇〇八年

注6 松尾聰「「ゑむ」の語義吟味」

『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』笠間書院

一九八四年

注7 吉村研一「源氏物語において「ほほゑむ」の果たした役割

——「ゑむ」と「ほほゑむ」の違い——」

『学習院大学国語国文学会誌』四七号 学習院大学文学部国語

国文学会 二〇〇四年

注8 片岡照子「源氏物語の笑いについて」

『国文白百合』五号 白百合女子大学国語国文学会 一九七四年三月

注9 注7に同じ

注10 中島尚「紫上のほほえみ——源氏物語の人物造型の方法につい

て——」

『国文学 言語と文芸』東京教育大学国語国文学会

一九七五年六月

注11、13、14

今井源衛「浮舟の造型——夕顔・かくや姫の面影をめぐって——」

『文学』五〇号 岩波書店 一九八二年七月

注15 高野香織「源氏物語における笑い——笑えなくなる紫の上」

『物語文学論究』一〇号 国学院大学物語文学研究会

一九九二年三月

注16 注10に同じ

注17 長尾美都子「浮舟——薫・匂宮の愛情について——」

『平安文学研究』七三号 平安文学研究会 一九八五年六月

※なお、本稿の『源氏物語』本文の引用は、『新日本古典文学大系

源氏物語』から引用した。

(あらいみさき)